AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2015.12) 平成26年度:36.

尿路変更術を受ける患者が術式を決定し日常生活に適応していく過程

村上 詩菜、寶屋敷 佳奈、澤田 裕子

尿路変更術を受ける患者が術式を決定し日常生活に適応していく過程

旭川医科大学病院　７階西ナースステーション　　○村上　詩菜、寳屋敷佳奈、澤田　裕子

Ⅰ．目的

膀胱癌で膀胱全摘出術及び尿路変更術を受けた壮年期の患者が、職場復帰や家庭での役割を自ら考え術式を決定し、日常生活に適応していく過程を明らかにし、その過程で必要とされる看護師の支援を検討する。

Ⅱ．方法

研究対象：膀胱全摘出後、導尿型新膀胱造設術を施行した30代の男性1名で、有職者であり、妻と子どもの3人暮らしである。

データ収集・分析方法：退院後に行った半構成的面接の逐語録、及び診療録から、術式や退院後の生活に関する記述を抽出してデータとし、意味内容を損なわないように要約しコードとした。意味内容の類似性によりカテゴリー化した。カテゴリー化の際は研究者間で複数回検討し、研究者以外からの助言を受けた。倫理的配慮として研究目的、参加は自由であり、参加を拒否した場合でも患者に不利益は生じないこと、個人情報を厳守することを書面で説明し同意を得た。所属施設の倫理委員会の承認を得た。

Ⅲ．結果

分析の結果､91のコードと10のカテゴリーに集約された。以下カテゴリーを【】で示す。

A氏は癌と診断され衝撃を受けるが、【癌と診断された事実を受け止める】努力をしながら、前向きに考えようとしていた。父親として【これからも家族と生きていきたいと強く想う】気持ちが膀胱全摘出術の決定に強く影響した。A氏は【尿路変更術による変化や影響について情報を集める】ことで管理のしやすさを比較し、家族との生活を考え、自己導尿が必要となっても術前の排尿様式に近く、採尿袋をつけない新膀胱という【ライフスタイルに合っている方を選ぶ】ことができた。術後は尿漏れなどの症状の出現に対し、【術式の選択が正しかったのか再度考える】場面や【性機能障害により自尊心が低下する】体験もあったが、徐々に【新膀胱の管理に必要な知識を理解する】【対処を獲得し日常生活に取り込む】ことがA氏の自信につながった。また職場との調整など【社会復帰後の生活を見据える】ことができた。これらの過程には常に【治療への意欲を支える家族の存在】があった。

Ⅳ．考察

Ａ氏は、仕事を続け家族と共に生活を送ることを目標に自ら情報収集し治療の意思決定ができていた。看護師は、患者の価値観を受け止めるとともに、情報の正確性を確認し、患者のニーズに沿った情報を補い、患者の主体的な意思決定を支えることが重要である。

術後は一時的な症状の出現や性機能の低下に対し、自尊心が低下したり、自分の選択を改めて考える場面もあった。患者は事前に情報を得ても術後の変化に戸惑うこともある。看護師は、患者の気持ちを受け止め、日常生活に新膀胱を取り入れていく中で出来ていることを伝えるなど患者が自信をもてるような関わりをすることが重要であり、それは患者が自身で行った意思決定の納得に繋がると考える。